中村　哲・尚子

Dr. Tetsu NAKAMURA
% Mission Hospital Peshawar
Peshawar, N. W. F. P
PAKISTAN

お元気ですか。6月末に一期を終えて一時帰国し日本に居ます。9月には再びペシャワールへ戻りますが，「故郷は遠きにありて憶うもの」という実感です。余りに騒々しく多忙なのです。こんな筈ではなかったと，幾度も幾度もなつかしい福岡の街並みや郊外の海辺に足を運びましたが，いつのまにか古いものは次第に失せ，野山は切り拓かれ，海も何か濁って感ずるのです。

平和な国，美しい国，人情味豊かな人々――少くとも九州だけは。と憶い続けていたものが，何か色褪せてしまいました。片想いだったのでしょうが，いつのまにかペシャワールの人々が想像する日本のイメージを私自身がとりこんでいたようです。そう，美しい誤解です。パキスタンの北西辺境の一般の住民は大変親日的でした。そこでは遠い日本がまるでお伽話のように美しく語られていました。

東方から或る民がおこって助けが来るという言い伝えの「ある民」とはジャパーン（日本）であるという人も居ました。宿敵ロシア，米英とかつて激しい戦争をし，今またどこからともなく素晴しい商品を次々と送りこみ，欧米の没落に一役買っている日本。このイメージが彼らの「東方の民」と重なってみえるのです。

おそらく他のワーカーの方々もそうでしょうが，現地の実情をどんなに正確に伝えようとしても，したためたものが出来た途端，何か造花をみているようなもどかしさを覚えるのです。人々の涙や喜び，怒りや祈りを伝える為の自分のことばの貧しさに驚きます。

時には現地では常識とされることを背景に何かを述べますと，予期せぬ賞讃と非難がおこってとまどいます。――やはり日本は遠い国だし，日本にとってもペシャワールは遠いのだとつくづく考えさせられました。

8月15日は敗戦記念日でした。パキスタンの人々には独立のきっかけを作った良き日です。日本は敗れたが英国はひきあげ，日本軍部に協力した印度国民軍は英雄となりました。アジアは一つではないという言葉を思い出しました。

平和は良いものです。とくに戦乱のアフガニスタンを思う時，そう思います。国内に大きな争乱がないというのはアジアでは日本だけです。しかし，わが国の平和は皮肉なことにアジア各国の争乱の上に成りたっているという事実を痛ましい気持でふりかえらざるを得ません。平和で美しい国の虚像が実像に変わるよう，仕事を尽しことばを尽し，片思いが正しい理解の上に成り立つ想愛の仲になるよう，祈らざるを得ません。